

7 金壽卿と中国の朝鮮語学

チェ ヒ ス
崔 義 秀

キムスギョソ
金壽卿先生は、1950年代から早くも中国の朝鮮民族社会に広く知られ、中国の朝鮮語学の発展に非常に貢献された傑出した学者である。先生は1956年11月25日、北京を経て延^{ヨンピョソ}辺大学に來られ、「周時經^{チュシギョソ}*1先生の学説」「朝鮮の文字改革」および「朝鮮語の優秀性」などの特講をされた¹。それから30年余りが過ぎた1988年8月、中国の北京大学朝鮮文化研究所と日本の大阪経済法科大学アジア研究所が共同で北京にて開催した、第2回朝鮮学国際学術討論会議に参加された。筆者はこの会議で、金壽卿先生に初めてお目にかかった。その後の1991年、朝鮮の平壤^{ピョソヤソ}にある人民大学習堂で金壽卿先生にお会いし、教えを受けた。

今日、遅まきながらこのような会議を催し、金壽卿先生の輝かしい研究業績を称える場を設けることができ幸いに思う。あわせて、今回の会議を契機に、先生の朝鮮語研究における業績と理論がより深く研究されることを願う。これは、朝鮮民族の言語研究の歴史において必ず果たされるべ

*1 1876-1914。大韓帝国期の言語学者で、近代朝鮮語学の先駆。

¹ 崔允甲教授は1956年冬、金壽卿先生が冬であるにもかかわらず外套を着ずに延辺に來られたと回顧した。

金壽卿先生の延辺大学訪問時期については、一部の記録において違いがある。筆者が『中国における朝鮮語の発展と研究』[崔允甲 1992] という本で整理した「中国朝鮮語文大事記」では1955年11月25日となっており、玄龍順^{ヒョソリヨソソソ}の『民族の魂を守って：延辺大学朝文学部が歩んだ45星霜』[兪容全 1997] に収録された大事記では、1953年9月とされている。これらはいずれも誤って伝えられているものであることを明らかにしておく。

き挙族的課題である。

1. 中朝文化交流の概況

金壽卿先生の朝鮮語文法理論が中国の朝鮮民族社会と朝鮮語研究に及ぼした影響を知るには、まず中朝両国間の文化交流がどのようなものであったかを振り返ってみる必要がある。

日本帝国主義による植民地統治期、多くの韓人^{ハニン}が中国に居住した。彼らの大多数が抗日闘士と貧しい農民たちであった。抗日闘士の隊伍には政治家、軍人、知識人、芸術家など、各界各層の人士がすべて網羅されていた。中国に居住する韓人は、20世紀初めから学校を建て、反日民族文化教育をおこなった。そうしたなか1908年に金躍淵^{キムヤギョン}が建てた明東学校^{ミョンドン}は、反日民族教育の揺籃であった。そのため1920年に日本の侵略者たちが延辺にやってきて野蛮な大虐殺をおこなったとき、明東学校を燃やしてしまった。しかし朝鮮民族は屈することなく、1923年に新校舎をつくり、民族的人材を養成した。その時期故国の優秀な知識人が中国に来て、朝鮮民族文化の教育事業に貢献した。明東学校に来て教鞭をとられた方々のなかには歴史学者の黄義敦^{ファンウィドン}、法学者の金徹^{キムチョル}、言語学者の張志暎^{チャンジヨン}などがおり、この学校では有名な詩人・尹東柱^{ユンドンジュ}、芸術家・羅雲奎^{ラウンギョ}をはじめとする優秀な人材が多く輩出された。

中国の韓人学校は、東北地区の吉林省、黒竜江省、遼寧省の三省にまたがって広く分布していた。このような韓人学校では非常に多くの抗日闘士を培養されただけでなく、解放後の韓国、朝鮮、中国の三国で活躍した出色の政治家、軍人、学者、芸術家たちも輩出された。この時期の韓人学校の民族語教育の内容、規範などは、故国のものをそのまま使っていたので、故国と何らの違いもなかった。

8.15解放以降、中国に居住していた韓人の3分の1が故国に戻り、3分の2

が中国に残って中国公民となった（1949年現在、中国の朝鮮民族の人口は120万人であった）。故国に戻った韓人のなかには才能ある知識人も含まれており、中国での朝鮮民族教育が影響を受けながらも持続的な発展がもたらされた。1949年には小学校1500箇所、中学生18万人、中学校70箇所、学生16,700人であった。1949年4月に延辺大学が設立され、第1期生となる451人が入学した。こうして中国朝鮮民族は、中国で自分たちの民族大学までもつ唯一の少数民族となった。中国の朝鮮民族文化の発展のため1945年に朝鮮語版の新聞『韓民日報』（その年11月に『延辺民報』に、翌年5月に『吉東日報』に、9月に『人民日報』に、1948年4月に『延辺日報』に改称される）が創刊され、1947年3月に延辺教育出版社が成立し、7月に東北朝鮮人民書店が延吉に建てられた。さらに1948年10月には文芸雑誌『延辺文化』が創刊され11月に放送局が成立し、延辺が中国の朝鮮民族文化の中心地となった〔高永一 2002〕。

ところが歴史的に故国に依ってきた中国朝鮮民族の文化教育は、8.15以後朝鮮半島が南北に分断されると、中国と韓国との文化交流は断絶し、中国と朝鮮の間でのみ文化交流がおこなわれるようになった。そのため解放初期の中国朝鮮民族の文化教育は、朝鮮に依拠することになった。8.15以後から1950年代後期までに朝鮮で出版された多くの書籍が中国で再版された。そのうちの大部分は原本どおりに再版され、一部は修正して出版された。特に中国の小中学校と大学の朝鮮語文法教育が朝鮮に依拠することになった。

中国で出版された小中学校の朝鮮語教科書のタイトルの変遷の歴史が、中国朝鮮民族の言語教育の歴史のありようを物語っている。解放前から1952年までは「ハングル」、1953-1958年は「朝鮮語」、1959-1962年は「朝鮮族語文*2」、1963年から現在までは「朝鮮語文」である。中国の小中学校のウリマルの教科書が「ハングル」と呼ばれた時期は解放前から受けて

*2 語文は国語と同じ

きた半島の影響が継続していた時期であり、「朝鮮語」と呼ばれた時期は朝鮮の影響を受けた時期である。中国で1957年から1959年までの間におこなわれた反右派闘争と地方民族主義に対する闘争を契機に、小中学校のウリマルの教科書に朝鮮の作品を入れられなくなり、中国で編纂された中国語の教科書をウリマルに翻訳して使わせ、タイトルも「朝鮮族語文」となった。そして1962年の反右派闘争の左傾的影響を是正し、「朝鮮語文」に修正された。

この時期、大学の朝鮮語学科でも左傾的思想の影響を受けてはいたが、教授と研究においては依然朝鮮の文法理論と研究成果を導入していた。また、延辺大学の朝鮮語学科の学生たちの参考資料はほぼ全部が朝鮮の資料であり、大学が編纂した文法教科書も朝鮮で出た文法書を多く参照していた。

社会的に中国朝鮮語が直面した主要な問題は、規範化である。叙事規範は基本的に朝鮮のものに倣ったが、語彙規範は状況が異なっていた。中国語が不断に中国朝鮮語に影響を与え、新聞社、出版社、放送局などの文化単位においてこのような単語の翻訳をどのように統一すべきかという問題に直面した。特に1957年の反右派闘争以降、いわゆる「漢語大躍進」の左傾思想の影響で大量の中国語の単語を借用し、語彙の使用に混乱が生じた。このような問題を解決するため1962年に延辺言語文化研究会が設立され、翌年3月に「延辺朝鮮族自治州語文工作暫行条例（草案）」「朝鮮語名詞述語制定統一施行方案（草案）」「朝鮮語表記法方案（草案）」などが討論された。1963年6月には中国政府の総理・周恩来が、中国朝鮮語は朝鮮に従えという指示を出した。1964年2月、「朝鮮語名詞、述語規範方案（草案）」が作成された。この時期の朝鮮語規範も朝鮮に倣ったものだが、1965年5月延辺大学の語文界では朝鮮の社会科学院言語研究所が討論用に公布した「朝鮮語分かち書き（草案）」を再版し、学生たちに配って参照させた。

文化大革命の期間には、1969年に北京の毛沢東思想学習班が「朝鮮語分

かち書き（草案）」を採択し、朝鮮の平壤に倣えという周恩来総理の指示に反対した。その後、延辺朝鮮族自治州の毛主席著作翻訳出版辦公室の言語研究組が1973年1月に「朝鮮語分かち書き（草案）」を執筆した。そして1974年7月に「朝鮮語標準発音法（草案）」を、9月に「朝鮮語綴字法（草案）」を出版した。

1977年5月に東北3省朝鮮語文事業協議小組が設立された。その年の8月、第1次会議で「朝鮮語標準発音法」「朝鮮語正書法」「朝鮮語分かち書き」「文章符号法」などの朝鮮語規範を採択し、これを1977年11月に延辺人民出版社から出版した。これ以後、中国朝鮮語は独自の規範を使うこととなった。翌年の1978年からは、朝鮮語語彙規範が進んだが、文化革命期に新たに作られた漢字語を廃止し、既存の語彙を使用することを原則とした。1978年12月5日に採択した「朝鮮語の名詞、述語の規範化原則」では、「朝鮮語の名詞、述語は平壤語を基準にして学べ」という周総理の指示に従い、言語の民族化と言語の大衆性、科学性の要求に合うよう規範することで、祖国の社会主義革命と社会主義建設のために、祖国の4つの現代化のために服務できるようにする」と規定した。

現在中国でおこなわれているウリマル教育は、2つのやり方によりおこなわれるという矛盾した状態にある。すなわち、中国人を対象とする朝鮮語教育では韓国の規範と理論に従い、中国の朝鮮民族の学生を対象とする中国朝鮮語文教育では中国で制定された朝鮮語規範に従っており、事実上中国国内では中国朝鮮語の規範と韓国の規範が並存しているのが実情である。

中国では1950年代から1970年代末まで韓国で出た資料は全く見る事ができず、朝鮮の文法書が中国の朝鮮語教育と研究に多くの影響を与えた。1980年代から韓国の資料に接することができるようになったが、それすらも1980年代初期には北京にある国家図書館に行かなければ、そう多くもない韓国の資料を見る事ができなかった。しかし韓中修交以後、両国の間

の文化交流が深まって韓国の資料が多く入ってくるようになり、韓国の文法理論が中国の朝鮮語学に影響を与えている。現在中国の図書市場で販売されている朝鮮語文の図書には、中国、韓国、朝鮮の3国で出版されたものがすべて存在する。これは中国の朝鮮民族が3国の文法規範に直面していることを意味しており、それによって生じる混乱は避けられない状況にある。

2. 金壽卿と朝鮮の朝鮮語学

金壽卿先生は、朝鮮において朝鮮語研究の枠組みをつくった言語学者である。その根拠は次のとおりである。

2-1. 「ハングル正書法統一案（1933）」改定の理論的基礎をつくった

朝鮮で「ハングル正書法統一案」の問題点が最初に提起されたのは、1946年8月である。この時共産党と新民党が合党して労働党になり、党の名称を「ロンドンダン（로동당）」とするか、あるいは「ノドンダン（노동당）」にするかという問題が慎重を期すべき問題として提起された。これはハングル正書法の頭音法則を遵守するか否かの問題で、論争を経て「ロンドンダン」とすると宣布された。「ロンドンダン」の表記は当時朝鮮でも遵守されてきた「ハングル正書法統一案」と矛盾するので、「ロドンダン」の表記の正当性を理論的に明らかにするという課題が提起されることになる。この任務を果たした最初の論文が、金壽卿先生の論文「朝鮮語学会『ハングル正書法統一案』の中で改正すべき諸点 其の一 漢字音の表記において頭音 n および r について」である【図1】。この論文は、『労働新聞』1947年6月6、7、8、10日付に掲載された。論文では統一案の頭音法則の制限性について以下の4点を指摘している。1つ目は表音主義の傾向、2つ目は非体系性、3つ目に他の外来音表記との矛盾、4つ目に言語音の発展を予見できなかった

た点などである。この論文が朝鮮労働党の機関紙に発表されたのは朝鮮労働党の言語政策の一端を示すものであり、統一案改定の嚆矢として評価されている [金榮晃・權昇模 1996 : 88-90]。



図1 金壽卿『労働新聞』論文 (1947)

ところが1948年8月31日、延辺の大衆書院が出版した朴相^{パクサンジュン}峻の『朝鮮語文法』の「お知らせ」に、「この本は、37年度 [民国紀元、西暦1948年] 中等学校教員研究会ハングル科において、東北地方の各中学校ハングル科の補充教材として「北朝鮮人民委員会が採択し、朴相峻先生の著した、初級中学校の朝鮮語文法」を刊行するとの討論がなされ、これを原本どおりに印刷したが、声音編第4章「転音」の第2節にある子音の転音のうち、rの転音に関するものは全て1947年5月30日に発表された「漢字音の表記における頭音 n 及び r について」という論文 (本院印刊のハングル正書法の巻末に転載されている) を参照されたく、またそのような音はすべて本音どおりに改正

したので了承されたい。1948年8月31日大衆書院」という記録がある。ここで言及された論文「漢字音の表記における頭音 n 及び r について」の著者が誰かは明かされていないが、金壽卿先生の論文であることは間違いない。われわれはここから、次の3つの事実を知ることができる。

第1に、金壽卿先生の論文が1947年5月30日に発表され、発表時の論文のタイトルと『労働新聞』に掲載されたタイトルが全く同じではなかったという事実である。第2に、この論文が発表直後に中国でも広く知られたという事実である。第3に、中国の朝鮮語においても1948年から朝鮮の原則どおり語頭でㄴ (n)、ㄹ (r) を表記したという事実である。大衆書院が再版した朴相竣の文法は1947年の刊行本で、ハングル正書法の頭音法則を遵守したものを再版する際に改定したものである。

その後数年間の研究を経て1954年に「朝鮮語綴字法」を制定し、朝鮮語の標準語も統一案の「標準語は大体現在中流社会で使われるソウル語とする」から「標準語は朝鮮人民の間で使用される共通性の最も多い現代語の中でこれを定める」へと修正された。

2-2. 朝鮮の規範文法を開拓し発展させた主力であった

8.15解放以後から1979年までに朝鮮で出版された代表的な文法書をみると、以下のとおりである。

- 1947年 『朝鮮語文法』 朴相竣、1948年再版
- 1949年 『朝鮮語文法』 朝鮮語文研究会
- 1960年 『朝鮮語文法 (1)』 科学院言語文学研究所
- 1961年 『現代朝鮮語 (1)』 金壽卿、金金石、金榮晃
- 1962年 『現代朝鮮語 (2)』 金壽卿、金白鍊
『現代朝鮮語 (3)』 金壽卿、宋瑞龍
- 1963年 『朝鮮語文法 (2)』 科学院言語文学研究所

- 1964年 『朝鮮語文法』 金壽卿、廉宗訥、金白鍊、宋瑞龍、金榮晃
 1970年 『朝鮮文化語 (1、2)』 ^{キムイルソン}金日成綜合大学朝鮮語学講座
 1972年 『文化語文法規範 (草稿)』 朝鮮文化語文法規範編纂委員会
 1973年 『朝鮮語』 権昇模*
 1976年 『朝鮮文化語文法規範』 朝鮮文化語文法規範編纂委員会
 1979年 『朝鮮文化語文法』 社会科学院言語学研究所

以上の文法書の中で、規范文法として評価されている文法書は1949年の『朝鮮語文法』、1960年の『朝鮮語文法 (1)』、1976年の『朝鮮文化語文法規範』である。

それでは、この3冊の文法書の著者が誰であり、どのように評価されているかを見てみよう。

1949年の『朝鮮語文法』の著者は「朝鮮語文研究会」となっている。朝鮮語文研究会は1948年10月、^{チヨンモン ス}田蒙秀を委員長として^{リ グン ノ}李克魯、^{ホ イク}許翼、^{ミョンウォルボン}明月峰、^{キムリョンソン}金龍成、^{シングヒョン}申龜鉉、^{ホンギムン}洪起文、^{キムピョンジェ}金炳濟、^{パクチョンシク}朴宗軾、^{パクチュニョン}朴俊泳、朴相埈、金壽卿の12人の学者からなる文法編修分科委員会を構成した。1年後の1949年9月に文法書の草稿が完成し、10月に分科委員会で討論され、12月30日に出版された。ところでこの本は、金壽卿先生が担当執筆した本である。^{チュチエ}『主体の朝鮮語研究50年史』には「この時期に出された『朝鮮語文法』(1949)は金壽卿が担当執筆した文法書で、解放後新たに受け容れた一般言語学理論に基づき朝鮮語の文法構造現象を分析・考察し、体系化したところにその意義がある」[金榮晃・権昇模 1996 : 365]、「人民たちと言語生活に真に助けとなる規范文法をつくることに対する偉大なる首領の綱領的な教示を貫徹する闘争の中で生まれた文法書がまさに『朝鮮語文法』(1949)である。『朝鮮語文法』(1949)は当時金日成綜合大学の朝鮮語学講座長であった金壽卿が中心となって執筆した。これはそれまで個別的に研究されてきた文法研究の成果を総合し、体系化する過程で達成された研究成果を代表すると言

える」[金榮晃・權昇模 1996 : 403] と評した。ここでの首領の教示とは、1948年1月14日に金日成が「朝鮮語文研究会会長と行った談話」を指す。この文法書のもつ最も致命的な弱点は、非科学的な「6字母」を入れたことである。

1960年に科学院出版社から出版された『朝鮮語文法 (1)』の著者は、科学院言語文学研究所となっている。しかし『主体の朝鮮語研究50年史』では次のように紹介されている。「この時期に出された単行本である『朝鮮語文法 (1)』(1960年)は金壽卿、李^リ權^{グニョン}榮が担当執筆したものであるが、解放後の研究成果を総合して叙述した規範文法として豊富な言語資料に基づき、朝鮮語の形態論的現象を深く分析・考察し、体系化したことにより、当時の文法教育と言語生活の改善に大きく貢献した。特にこの本は、過去の朝鮮語研究家たちが成し遂げた成果を継承発展させる一方、先進言語理論を導入し、言語学部門の研究家たちの広範な意見を斟酌して体系立てたことにより、過去の文法書に比べて一層高い発展水準を示していると言える」と評した[金榮晃・權昇模 1996 : 369]。『朝鮮語文法 (1)』と同系列の『朝鮮語文法 (2)』もまた著者は科学院言語文学研究所となっているが、執筆者は鄭^{チョン}烈^{リョル}模、宋^{ソン}瑞^{ソリョン}龍であることが明らかにされている[金榮晃・權昇模 1996 : 407]。『朝鮮語文法 (2)』は文章論である。ところがこの時期の文法書の中で金壽卿、宋瑞龍が書いた『現代朝鮮語 (3)』(高等教育出版社、1962)【図2】が文章論の代表作として評価されている[金榮晃・權昇模 1996 : 408]。上述した諸事実から、われわれは金壽卿先生が1960年代の朝鮮語規範文法の編集の主力であったことを知ることができる。

1976年の『朝鮮文化語文法規範』は、金日成の主体思想に基づいて編集された規範文法である。この文法は、金日成綜合大学の朝鮮語学講座が中心となり、社会科学研究所とさまざまな師範大学を網羅する多くの有能な学者たちが集まり、討議を経て執筆がなされた[金榮晃・權昇模 1996 : 421]。ところがこの本は、それ以前の時期の研究成果に基づいて編集されており、

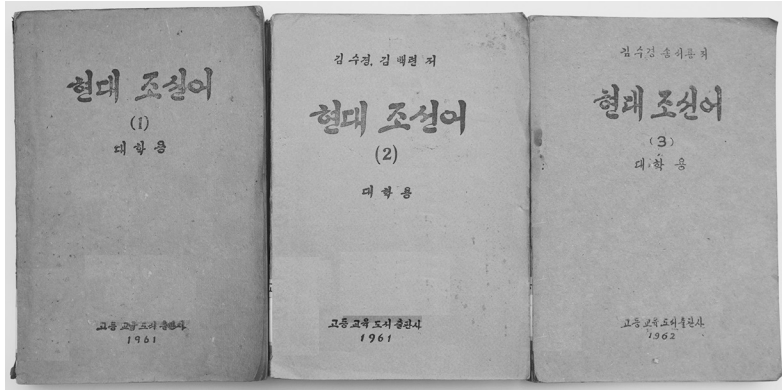


図2 『現代朝鮮語 (1)~(3)』 (1961-62)

金壽卿先生の理論が多く反映されていると思われる。この本は語音論、形態論、文章論として叙述された。形態論の品詞設定においては、「前の時期の『朝鮮語文法 (1)』(1960)と同じ体系」とされ[金榮晃・權昇模 1996 : 353]、文章論の文章の標識は『現代朝鮮語 (3)』の「陳述性」、『朝鮮語文法 (2)』の「述語性」と同じであり、単語結合は『現代朝鮮語 (3)』(1962)と同じ立場を取っているが、漢字語になっていた學術用語をこなれたウリマルに変えたという側面で違いがあるのみだとした[金榮晃・權昇模 1996 : 422]。これは1976年度の規範文法にも、金壽卿先生の文法理論が多く反映されていることを示している。

2-3. 中学校の學校文法の基礎をつくった

『主体の朝鮮語研究50年史』において、朝鮮で出版された小中学校の文法書については全く言及されておらず、同書を通じては朝鮮での小中学校の朝鮮語文法の編纂がどのようになされたかを知ることはできない。しかし中国で再版された朝鮮の文法教科書を通じて、朝鮮における40年代と50年代に小中学校の學校文法書が出版されていたことが分かる。中国で出版

された朝鮮の小中学校の文法教科書は、以下のとおりである。

(1) 朴相竣『朝鮮語文法』(1947)

先に引用した再版者の「お知らせ」で明らかにしたように、朴相竣の文法を「北朝鮮人民委員会の採択である朴相竣先生の著、初級中学校の朝鮮語文法」とした。ここで「初級中学校の朝鮮語文法」と明言していることから、朴相竣の文法が朝鮮において初級中学校の文法として使われ、社会でも使用されたものと思われる。これは40年代末に朝鮮で学校文法の出版に早くも重きを置いていたことを示している。

(2) 鄭烈模、李權榮、安文求の小学校用『国語文法教科書』

1950年代に延辺教育出版社において再版された朝鮮の小学校の文法教科書を通じて、朝鮮の鄭烈模、李權榮、安文求^{アンムング}*などの学者らが6.25戦争後、1950年代中頃に朝鮮の小学校用の文法教科書を編纂したことが分かる。

A. 鄭烈模、李權榮『朝鮮語文法』(初級小学校教科書、第4学年用)(1956)

この文法書は、延辺教育出版社において1956年3月に第1版として再版された文法書で、この本の著者が鄭烈模、李權榮となっている。ここから朝鮮で出版した書籍が中国で再販されたことは明らかであるが、朝鮮のどの時期のどのバージョンを再版したのかは明らかになっていない。

B. 鄭烈模、李權榮『朝鮮語文法』(高級小学教科書、第1、2学年用)(1956)

この文法書は、延辺教育出版社において1956年8月に第1版として再版された文法書で、著者が鄭烈模、李權榮となっている。そして同書では出版元が朝鮮の教育図書出版社となっており、1956年5月に第3版を出版したことが明らかになっている。

C. 鄭烈模、安文求『国語文法教科書』(人民学校、第3学年用)

この文法書は、1957年に延辺教育出版社において修正・出版する際

に書かれた「出版者の言葉」で、朝鮮の3年生用の文法書であることが明らかにされた。「出版者の言葉」には、「この本は朝鮮民主主義人民共和国の人民学校第3学年用の国語の文法教科書（鄭烈模、安文求著、教育図書出版社、1956年度、第2版）として編纂されたものを人民学校の国語文法の参考資料とウリ（延辺の）学校の実際に適合するよう修正・改編したものである。……1957年1月、延辺教育出版社」と書かれている。この文法書を延辺では3巻に改編し、第2巻と第3巻が57年3月に初版として出版されたが、第1巻はまだ発見されていない。ただ、延辺教育出版社において改編された『朝鮮語文法』（小学校教科書第1冊、1956年2月、第1版）が発見されている。これが鄭烈模、安文求の文法書を3巻に改編して分けられたものの第1巻であると推定される。すなわち、1956年2月に改編されるときに第1冊とし、1957年には第2巻、第3巻としたのではないかと思う。

上述した状況から、われわれは以下の諸点に要約することができる。

第1に、朝鮮で6.25戦争が終わり、小学校用の文法教科書が出版された。この教科書は1955年（1954年？）から出版されたものと推測される。

第2に、小学校用の文法教科書の著者は鄭烈模、李樞榮、安文求の3人である。鄭烈模、安文求が小学校3年生用の文法書を執筆し、鄭烈模、李樞榮が4年生、5年生、6年生用を執筆した。ここでわれわれは、朝鮮において1950年代中頃に、小学校3年生からの文法教科書が書かれていたことを知ることができる。

第3に、朝鮮における書籍名は『国語文法』であったが、中国で再版されて『朝鮮語文法』に変更されたものと思われる。

(3) 金壽卿の中学校用『朝鮮語文法』（1954年11月）

この文法書について、韓国では誤った伝えられ方をしている。金敏洙教^{キムミンス}

授の『現代語文政策論』920頁では、「彼らの研究は前期に安文求の『朝鮮語文法』（初級中学校用、1954）、洪起文の『郷歌』（1956）、『史読』（1957）、金炳濟の『方言学』上（1959）……」と述べ、朝鮮で1954年に出版された初級中学校用『朝鮮語文法』の著者が安文求であるとした。しかしこの本の著者は安文求ではなく金壽卿であり、安文求は同書の語学編修とされている。

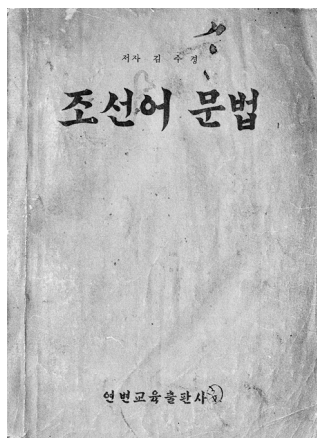


図3 金壽卿『朝鮮語文法 初級中学校用』（延辺版、1955年）

この本を朝鮮の教育図書出版社が1954年11月に初版として発行した。中国では1955年3月に編集、5月に再版されたので、本が出て半年後に中国で再販されたということである【図3】。この本の再版者である延辺教育出版社の「翻印者の言葉」をそのまま紹介すると、次のとおりである。

この本は、朝鮮民主主義人民共和国の初級中学校用の『朝鮮語文法』教科書として金壽卿先生が著作したものである。

本社は、朝鮮族の初級中学校で適切な朝鮮語の文法教科書がない情況下において、そしてわが朝鮮族大衆にもまたこのような文法書籍が

欠乏した状況下で、著者の同意を経てこの本を翻印出版する。

原書は初中1、2学年用と初中3学年用の2冊に分けられた。しかしわれわれは、発行上の便宜のためにこれを合本して発行する。

最後に、原書にある綴字法と字母の名称には、著作された時間的差異によって朝鮮民主主義人民共和国科学院が1954年に出版した『朝鮮語綴字法』と一部統一されなかった部分があったので、著者の同意を経て修正したということを述べておく。われわれの修正によって発生した誤謬について、著者および読者は指摘してくれるよう願う。

1955.3.20. 延辺教育出版社

ここでの「翻印」とは中国語の「翻印」を音訳した言葉で、ウリマルの「再版」や「復刻」の意味である。上の「翻印者の言葉」でも分かるように、この本の綴字法が1954年9月9日に公布された「朝鮮語綴字法」と異なるものがあったので、この本の編集が新たな綴字法が公布される前に終わったことを意味する。当時の本の出版が現在とは異なり活字を組んで組版しなければならぬので、少なくとも2か月はかかることを勘案すると、その年の9月9日以前に同書が印刷に付されたのであろう。

この本が中国において全部で何回印刷されたのかは分からないが、1956年10月の第4次印刷まで、都合53,400部が印刷された。1955年版本の表題は「著者金壽卿、朝鮮語文法、延辺教育出版社」となっているが、1956年10月版本の表題は「初級中学校教科書、朝鮮語文法（代用本）、延辺教育出版社、1956」となっており、表題では著者の名が明示されていない。しかし1ページ目の「翻印者の言葉」は1955年の版本の原文がそのまま掲載されており、本の著者が金壽卿であることが明らかにされている。

50年代以降、朝鮮における小中学校の文法教科書出版の詳細な状況は分からないが、50年代に鄭烈模先生が朝鮮の小学校の文法教科書の編集を担当し、金壽卿先生が初級中学校の文法教科書の編集を担当したことは疑

問の余地がないと認められる。したがって朝鮮で金壽卿先生と鄭烈模先生の2人が50年代の学校文法の基礎をつくったのである。

2-4. その他の研究業績

(1) 語彙論研究

金壽卿先生の『現代朝鮮語 (1)』において語彙論が扱われているが、この著作がこの時期の語彙意味論の基礎概念を定立し、総合体系化し、理論化した最初の著述として評価されている [金榮晃・權昇模 1996 : 163]。

(2) 文体論研究

金壽卿先生が1964年に朝鮮で最初に『朝鮮語文体論』(高等教育図書出版社)を發表した。この本は、朝鮮における文体論の成立として評価されている [金榮晃・權昇模 1996 : 212]。

その他にも、金壽卿先生は「龍飛御天歌^{*3}に見られる挿入字母の本質」(『朝鮮語研究』1巻2号、1949)などをはじめとする優秀な論文を發表し、新たな文法理論の導入に大きく寄与した。

金壽卿先生が蓄積された業績を振り返ってみると、先生は朝鮮の現代朝鮮語研究の新たな道を開拓され、朝鮮語研究の主流をリードしながら朝鮮の言語学の発展、さらにはわが民族の言語学の発展に不朽の貢献をした、傑出した学者であるといわざるを得ない。

3. 金壽卿と中国の朝鮮語学

金壽卿先生は中国朝鮮語学の発展にも非常に寄与した学者である。

*3 朝鮮王朝建国の事蹟を記した叙事詩。世宗代に創作。

3-1. 金壽卿と中学校の朝鮮語文法教育

1950年代、中国の小中学校の朝鮮語教育は朝鮮の影響を受け、小中学校の学生用の文法教科書を発行した。小学校における文法教科書は、先述のように鄭烈模、李權榮、安文求の小学校用の文法教科書をそのまま使うか、あるいは改編して使用した。中国では鄭烈模、安文求が書いた3年生用が改編されたのだが、第1冊は金益榮^{キムイギョン}、第2巻は李正龍^{イジョンソン}、第3巻は金斗川^{キムドゥチョン}がそれぞれ改編した。

中学校では1948年から朴相竣の『朝鮮語文法』を再版し、教科書として使った。朴相竣の文法が何度再版されたのかは分からないが、1951年にも再版されている。その後1955年に金壽卿の『朝鮮語文法』が中学校の朝鮮語文法教科書として採択され、50年代末まで中学校の朝鮮語文法教科書として使われた。このことは50年代中頃から金壽卿の文法が中国の中学校の朝鮮語文法教授に非常に大きな影響を与えていたことを物語っている。筆者もこの時期に金壽卿先生の『朝鮮語文法』で、ウリマルの文法教育を受けた。1960年代から中学校の朝鮮語教育において文法の科目を別に設けず、朝鮮語学科において文法知識を伝授したが、基本体系は金壽卿先生の文法体系であった。その後、1984年に延辺教育出版社が、中国では初めて金斗川、李奎浩*、朴世岩、張榮泰などが編纂した独自の『中学生朝鮮語実用文法』を編集・出版した。

3-2. 金壽卿と大学の朝鮮語文法教育

中国朝鮮族の小中学校が朝鮮の影響を受けたのは50年代であり、60年代からは朝鮮の影響をほとんど受けなくなった。しかし大学における朝鮮語文法教育は事情が異なり、左傾思想の影響を受けはしたが、中韓修交以前まで大学生の朝鮮語学習の主な参考書は、朝鮮で出版された資料であった。

1949年に設立された延辺大学朝鮮語学科が、草創期には朝鮮民主主義人民共和国の金日成総合大学朝鮮語学科の助けを多く受けた。資料によると、

反右派闘争以後、民族整風期である1958年にも、延辺大学師範学院教務課において朝鮮の金日成綜合大学朝鮮語学科用の『古代朝鮮語』教授案を謄写本として翻印した。50年代初期に金壽卿先生が金日成綜合大学朝鮮語学科の講座長を務めていたことを考えると、金壽卿先生が延辺大学朝鮮語学科の建設と発展に直接的または間接的に多くの寄与をしたことは、疑問の余地がない。なぜならば、金日成綜合大学朝鮮語学科の資料を延辺大学に送るには、学科長の批准なくしては不可能だからである。

延辺大学朝鮮語学科の草創期には^{キムチャンゴル}金昌杰*、^{イホウオン}李鎬源*の2人が朝鮮語文法を教えたが、1949年の朝鮮語文研究会が編纂した『朝鮮語文法』を教材にしていた〔崔允甲 1992：120〕。先述したように1949年の朝鮮語文研究会の『朝鮮語文法』は、金壽卿先生が担当執筆した書籍である。この文法では、それ以前の時期の研究成果を受け容れながらも、新たな探求がおこなわれた。この本は、1956年に独自の教材を編集するときまで、延辺大学の朝鮮語学科の教材として使用された。1960年代には『朝鮮語文法 (1)』が延辺大学朝鮮語学科の学生たちの主な参考書となった。この本の形態論もまた、金壽卿と李槿榮が執筆した本である。このことからわれわれは、金壽卿先生が事実上中国の大学校の朝鮮語文法教育の基礎をつくるのに非常に大きく寄与したと言える。のみならず、金壽卿先生の文法理論はその後の大学校の朝鮮語文法教育にも持続的に影響を与えた。

3-3. 金壽卿と朝鮮語文法研究

20世紀の中国の朝鮮語研究の主力は、延辺大学であった。1949年の延辺大学成立以前は北京大学に朝鮮語学科が開設されていたが、延辺大学が建てられてからは延辺大学朝鮮語学科が中国の朝鮮語研究の主力となった。50年代前半は朝鮮語文法研究の人材の養成期で、これといった研究成果は出されなかった。1956年に延辺大学朝鮮語講座において学生用教科書として『朝鮮語文法』を編纂したが、李世龍が語音論を、崔允甲が形態論を、

金學鍊が文章論を執筆した。謄写本として出された同書は、当時中国で育成された朝鮮語研究者が初めて書いた朝鮮語文法の本である。この本は、延辺大学の学生だけでなく、東北三省の中学校と朝鮮語人材の主要な参考書となった。この本の執筆には、1949年の朝鮮語文研究会の『朝鮮語文法』、朴相竣の『朝鮮語文法』、金壽卿の『朝鮮語文法』、崔鉉培^{チュエヒョンベ}の『ウリマル本』、ソ連のホロドーヴィチの『朝鮮語文法』などが参考にされた〔崔允甲 1992：121〕。

1963年と1964年に延辺大学で新たに『古代朝鮮文講読』と『現代朝鮮語』を内部教材として編纂・印刷したが、『現代朝鮮語』は活字本であり、『古代朝鮮文講読』は謄写本である。『古代朝鮮文講読』（1963）は崔允甲教授が編集し、『現代朝鮮語』は新たに養成された教員方^{パンジャンチュン}長春^{キムサンヒョン}と金相願が編集した。方長春が『現代朝鮮語（語音論）』（1964）と『現代朝鮮語（形態論）』（1、2）（1963）を、金相願が『現代朝鮮語（文章論）』（1963）を執筆した。延辺大学で新しく編纂された『現代朝鮮語』は、1960年に朝鮮社会科学院から出された『朝鮮語文法（1）』と、1961-1962年に金日成綜合大学から出された『現代朝鮮語』を参考にしているだけに、この2冊の文法書の見解をそのまま用いたものと評価されている。この本は、品詞の設定においては『現代朝鮮語（2）』の見解に従わず、『朝鮮語文法（1）』の見解に従った。先述したように、朝鮮社会科学院『朝鮮語文法（1）』と金日成綜合大学『現代朝鮮語』はいずれも金壽卿先生が編纂した文法書であることを考えると、1960年代の中国の朝鮮語研究もまた金壽卿先生の影響から自由ではありえなかった。

1966年3月に延辺歴史言語研究所の言語研究室は『朝鮮語語彙論基礎』（延辺教育出版社）を出版した。この本の基本理論もまた、金壽卿先生が執筆した『現代朝鮮語（1）』の語彙論の部分の理論をそのまま踏襲したものである。

1970年代、文化大革命の影響を受けて中国朝鮮語研究が活発に展開され

なくなったが、数冊の文法書が公開・出版された。70年代に発表された文法書としては、徐永燮^{ソ ヨンスブ}、金基鍾^{キムギジョン}の『朝鮮語文法（形態論）』（1972）、崔允甲の『朝鮮語語音論』（1973）、崔允甲の『朝鮮語文法（文章論）』（1974）、許東振^{ホドン}、韋旭昇^{ウイクスン}の『朝鮮語実用文法』（1976）などがある。このような文法書は、当時の社会的需要から通俗性と大衆性を強調し、応用に関心を向けた。しかし、数十年間影響を受けてきた朝鮮の文法理論、体制などから抜け出せず、朝鮮の理論を踏襲していた。特に形態論においては、金壽卿の『現代朝鮮語（2）』の影響を受け、品詞の設定において象徴詞を設定し、体系も『現代朝鮮語』の影響を受けた。

1980年代は、中国朝鮮語研究の開花期であると言える。この時期中国では、多くの文法書が出版された。それらを挙げると、崔允甲『朝鮮語文法』（1980）、徐永燮『朝鮮語実用文法』（1981）、東北三省編纂小組『朝鮮語文法』（1983）、延辺教育出版社『中学生朝鮮語実用文法』（1984）、金鎮容^{キムジンヨン}『現代朝鮮語』（1986）、崔允甲、許東振、金相願『朝鮮語文法』（延辺大学朝文学部）（1986）、崔允甲『中世朝鮮語文法』（1987）、姜銀國^{カンウングク}『現代朝鮮語』（1987）、崔明植^{チェミョンシク}『朝鮮語口頭語文法』（1988）、李貴培^{リギベ}『朝鮮語文法理論』（1988）などである。このような文法書の中で朝鮮の文法理論の影響から抜け出そうと努力したのは、崔允甲の『朝鮮語文法』（1980）である。その他の文法書は、理論と体系において朝鮮の60年代の文法と70年代の文法の影響から抜け出せなかった。先述したように、金壽卿先生の文法理論と体系が朝鮮の60年代の主流をなし、それが70年代半ばに出された文化語規範文法にまで莫大な影響を及ぼした。中国の80年代に出た朝鮮語文法の大多数が朝鮮の60-70年代の文法の影響から抜け出せなかったという事実は、金壽卿先生の文法理論と体系が80年代まで中国の朝鮮語文法研究に非常に大きな影響を与えたことを意味する。

1992年の中韓外交樹立以降、韓国の文法理論が中国に広く伝播し始め、中国人を対象とする韓国語教育が発展し、朝鮮民族を対象とする小中学校

の朝鮮語教育が委縮して、中国における朝鮮語研究にも変化が生まれ、韓国の文法理論の影響が広がる趨勢へと向かい始めた。

3-4. 金壽卿と一般言語理論の研究

延辺大学の崔允甲教授は、金壽卿先生は中国朝鮮語学者たちの一般言語学理論の学習と研究にも非常に多くの力を与えたと述べた。議論に先立ち、以下の内容はすべて崔允甲教授の回顧によるものであることを明らかにしておく。

解放後、社会主義陣営と資本主義陣営の対立により、中国国内の朝鮮語学者たちが新たな言語理論を受け容れることのできる道は2とおりあった。ひとつは、社会主義集団の盟主であり言語理論の発展をもたらしたソ連の理論を学ぶ道であり、もうひとつは中国から受け容れた言語学理論を学ぶ道であった。しかし日帝の統治期、日本語を学んだ朝鮮民族の学者たちのロシア語や中国語のレベルが制限されており、ロシア語で書かれた書籍や中国語で書かれた書籍を読むことができなかった。このような状況にあって、朝鮮語文法のみならず一般言語学理論を学ぶことのできる道は、朝鮮で翻訳された旧ソ連の言語理論であった。延辺大学草創期である1951年にチャグワンイル車光日先生が「言語学概論」の講義を担当したのだが、その際、金壽卿先生が翻訳したレフォルマツキー言語学を教材にして教えていたという。

崔允甲教授は、金壽卿先生を一般言語学理論の普及に大きく寄与した方とみなし、先生は言語理論に該博であり、新たな理論を多く掌握している方だと述べた。その他にも、金壽卿先生の論文「現代朝鮮語研究序説」（『朝鮮科学院学報』、1953年1号）、朝鮮語構造の特性、朝鮮語の優秀性などについての論文と講義は、先生に深い印象を与えたと述べた。

最後に、崔允甲教授は、金壽卿先生は1950年代と1960年代の延辺大学をはじめとする中国の多くの朝鮮語教員と学生の養成、および朝鮮語研究に非常に大きく貢献した優秀な学者であることを再三にわたって強調した。

上述した諸般の事実からわれわれは、金壽卿先生は朝鮮民主主義人民共和国の朝鮮語学の発展、中国朝鮮語学の発展、さらにはわが民族語学の発展に卓越した貢献をした傑出した言語学者であることを知った。しかしわれわれは、今日になってようやく金壽卿先生の業績を称えたが、先生の研究業績すらも十分に整理できていない状況にある。実に残念なことである。今回の会議を契機に、先生の言語哲学、言語理論に関する研究を誠実にを行い、さらにはそれがわが民族言語の統一と共同の発展における素晴らしい基礎となるよう願う。

参考文献

- 高永一 [2002] 『중국抗日戰爭과 조선민족』, 서울: 도서출판 백암.
金榮晃・權昇模* [1996] 『주체의 조선어연구 50년사』, 평양: 김일성종합대학 조선어 문학부.
崔允甲 주필 [1992] 『중국에서의 조선어의 발전과 연구』, 延吉: 연변대학출판사.
玄龍順 [1997] 『겨레의 넋을 지켜: 연변대학 조문학부가 걸어온 45성장』, 延吉: 연변 대학출판사.

(訳者付記) 文中で*印の付いた人名(初出のみ記した)は、漢字表記が確認できなかったため、同音の漢字を当てたものである。

(呉仁濟 訳)